

B.S. ロウントリーの田園ビレッジ建設と田園都市運動 —イギリスにおける貧困研究と住宅問題の関連—

Benjamin Seebohm Rowntree and The Garden Village :
The Early Garden City Movement in the UK

武 田 尚 子*

Naoko TAKEDA*

要約: 本稿は、イギリスの貧困研究で名高いベンジャミン・シーボーム・ロウントリーが関わった田園ビレッジ建設を取り上げ、歴史社会学的視点から、その意義について考察する。この事例は、貧困研究と20世紀初頭の社会的実践の関連を考察する上でも示唆に富む。また、この田園ビレッジ建設は、イギリスの田園都市運動の展開と軌を一にしたもので、田園都市運動の意義について考察することができる。

1904~23年までの田園ビレッジ建設の推移をたどると、「ワーキング・クラスが現実には負担可能な住宅地を供給する」ことと、「公的住宅供給を実現させるためのモデルを作る」ことに尽力した関係者の努力の軌跡が浮かび上がってくる。

従来の田園都市運動に関する先行研究では、田園都市運動が結果的にミドル・クラス対象の住宅供給モデルとして有益だった側面が明らかにされてきた。しかし、本稿で取り上げる事例は、当時の社会状況を鑑みると、ワーキング・クラス対象のモデルを提示することへの社会的要請は大きく、田園都市運動の流れをくんだ建設プロジェクトに、その要請に応えるものがあつたことを示している。

20世紀のイギリス福祉国家形成の過程において、貧困研究を出発点として、労働者に対する「生活保障」「福祉」の一政策として、住宅政策が位置づけられていくプロセスを本事例から読み取ることができる。

1. はじめに

本稿は、イギリスのヨーク貧困調査で名高いベンジャミン・シーボーム・ロウントリー(1871-1954)が関わった田園ビレッジ建設について、歴史社会学的視点から、その意義について考察する。この田園ビレッジは、

* 武蔵大学教授

イングランド北部のヨーク市郊外に建設が進められた「ニュー・イアーズウィック (New Earswick)」である。イギリスでは 20 世紀初頭に田園都市運動が普及し、多くの賛同者を集めた。ロウントリーの田園ビレッジは、田園都市運動の初期に建設が始まり、田園都市運動の展開と軌を一にしている。ニューイアーズウィックの事例を通して、田園都市運動に対する社会の要請や、田園都市運動の意義について考察することができる。

ニューイアーズウィックの建設は、1901年に着工された。これはシーボーム・ロウントリーが第1次ヨーク貧困調査の成果として『貧困—都市生活の研究』を出版した年に当たる。貧困調査で、住居は貧困ライン確定の主要な調査項目の1つであった。調査の知見を踏まえて、田園ビレッジの建設が進められた。調査成果と社会的実践の関連を考察する上でも、示唆に富む事例といえよう。

本稿で用いた資料は、イギリスのヨーク大学ボースウィック・インスティテュート (Borthwick Institute) に所蔵されているロウントリー・コレクション (Records of Rowntree and Company) である。ロウントリー家は、ココア・菓子製造業のロウントリー社のオーナーで、ロウントリー社は1897年に企業化した。1969年に菓子製造のマッキントッシュ社を吸収合併し、ロウントリー/マッキントッシュ社になったが、それまでの70余年(1897-1969)におよぶ会社経営や、ロウントリー家に関わる資料が、ボースウィック・インスティテュートに収められている。B.S. ロウントリーおよびロウントリー社を研究する際の貴重な第1次資料である。

2. 田園都市協会とクエーカー企業経営者

先行研究で明らかにされてきたイギリスの田園都市運動の概略と、その意義はおおよそ次のようなものである¹⁾。田園都市運動は、1899年の田園都市協会の設立を契機に本格的に広まっていった。しかし、それ以前から、都市郊外に職住近接の住宅地を建設する試みは始まっていた。産業資本家

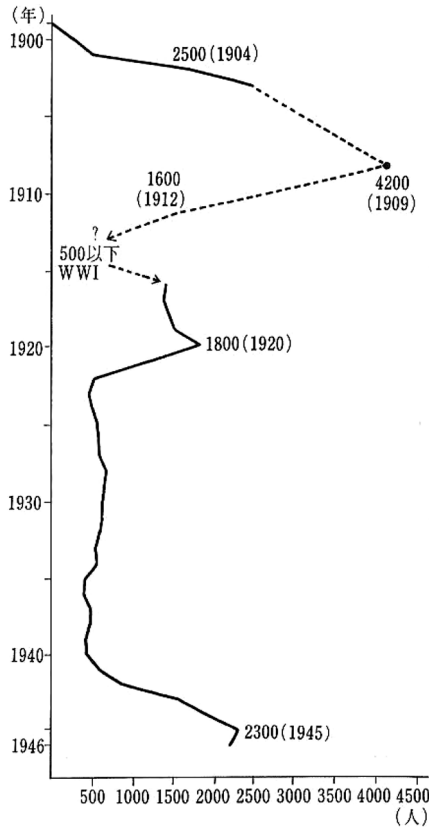
が自社の従業員のために良好な住宅を供給することを目的としたもので、遡ればロバート・オーウェンの「ニュー・ラナーク」がある。19世紀後半には、エドワード・アクロイドによる「アクロイドン」（ハリファックス郊外，1859年着手），タイタス・ソールトによる「ソルティア」（ブラッドフォード郊外，1863年着手），ウィリアム・リーヴァによる「ポート・サンライト」（リヴァプール郊外，1888年着手），ジョージ・キャドバリーによる「ボーンヴィル」（バーミンガム郊外，1880年着手）など複数の事例がある。

個々の産業資本家が居住改善の試みに着手したのは、産業化の進展によって増加した労働者階級の多くが劣悪な居住環境におかれている社会問題を解決するためだった。田園都市の理念で、居住改善の流れを方向づけていったのがエベネザー・ハワード（Ebenezer Howard, 1850-1928）である。

ハワードは1898年に『明日一真の改革にいたる平和な道（To-morrow : A peaceful path to Real Reform）』を刊行し（1902年に改訂版として『明日の田園都市（Garden Cities of To-morrow）』刊行），田園都市の理念を提唱した。1899年に賛同者12名によって田園都市協会（Garden City Association）が設立された。田園都市協会の定義によると、田園都市とは「健康な生活と産業のために計画された都市で、各種の生活手段が成り立つのに十分で、かつ過大ではない規模を持つ。周囲は村落帯で囲われ、全地所は公的に所有されるか、またはコミュニティのために一括信託で保有される」地域のことである。自然環境・生活環境の良い郊外で、生活と生産の並立が理想とされた。「ハワードの理念に従って、田園都市を実験的に建設し、その有効性を世間に伝えること」が協会設立の目的だった。

1901年に自由党の下院議員経験者であるネビル（Nevill, R. K. C.）が会長になり、この年の会員は325名に達した。1901年の田園都市協会の会合は、ボーンヴィルにあったジョージ・キャドバリーの邸で開かれた。キャドバリーは田園都市協会の設立以前に田園ビレッジである「ボーンヴィル」の建設に着手していた。キャドバリー家は、ロウントリー家と同じようにココア・菓子製造業を経営し、キャドバリー社のオーナーである。両家は

図表 1 田園都市協会会員数の推移



出典：[増田 1993 : 150], [Hardy 1991 : 300]

クエーカー教徒で親しい間柄であり、かつともに自由党支持者だった。

1903年に田園都市協会の会員は約2500名に達し(図表1)、田園都市の建設が計画された。建設主体として第一田園都市株式会社が設立され、建設地としてロンドン北西56キロメートルのレッチワースが選定された。レッチワースの設計者を選ぶために、1904年に競技設計が開催された。ここで最優秀を獲得したのが、レイモンド・アンウィン(Raymond Unwin)である。アンウィンは妻の兄にあたるバリー・パーカー(Barry Parker)と

一緒に建築設計事務所を経営しており、この2人がレッチワースの担当者になった。

ロウントリーの「ニュー・イアーズウィック」建設は、田園都市協会のプロジェクトとは別個に進められた住宅地建設であるが、1901年にアンウィンとパーカーに設計を依頼し、着工した。1904年にニューイアーズウィックでは入居が始まっていた。この2人は、レッチワースよりも先にニューイアーズウィックの設計を手がけており、この経験がレッチワースの競技設計で好成績をあげることに貢献したという推測も成り立つ。このようにロウントリーのニューイアーズウィックと、田園都市協会のレッチワースは、同時期に同じ担当者によって併行して進められたプロジェクトだった。

1903年に始まったレッチワースの建設プロジェクトに続いて、田園都市協会は1920年にレッチワースの南のウェルウィンに、第二の田園都市の建設を始めた。この2つの田園都市を実現させたことが田園都市協会の主たる成果である。田園都市運動の意義として、先行研究では2つの田園都市を生み出したことを踏まえて、次のような点が指摘されている。2つの田園都市は、職住近接の居住モデルを現実に示した。これは第二次大戦後の住宅政策に生かされ、大都市郊外に衛星都市を配置することや、ニュータウンの建設が実現していった。田園都市協会の試みは、戦後の住宅政策への前段階になった。

当初、田園都市協会が住宅供給の対象として想定していたのは、ワーキング・クラスだった。しかし、良好かつ空間的に余裕がある住環境の維持費用を負担することが可能だったのはミドル・クラスである。田園都市運動は、20世紀前半に主としてミドル・クラスに良好な住宅地を提供することに貢献したというのが一般的な理解であるといえよう。

ミドル・クラス対象の住宅地になったという特徴は、田園都市協会設立以前に着手されたキャドバリーの「ボーンヴィル」にも共通している。キャドバリーの「ボーンヴィル (Bournville)」は、1879年にキャドバリー

社の工場がバーミンガム市内から郊外に移転し、翌1880年に工場に隣接する120エーカーの区域で建設が始まった。建坪率は25%以下で、敷地面積の75%以上はガーデンとして利用され、空間的に余裕のある住環境に、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響をうけた住戸が建設された。ジョージ・キャドバリーの理想が反映された優れた住環境であったが、過当たりの家賃は8シリングと高いものになった。

ロントリーの「ニューイアーズウィック」建設は、同業者で親しい間柄だったキャドバリーの「ボーンヴィル」建設にならったものである。ロントリーやキャドバリーが田園ビレッジの建設に関心を寄せた背景として、両者がクエーカー教徒の出自であったという点は重要である。

クエーカー(The Religious Society of Friends, 略称: Quakers)は、17世紀半ばに組織化されたイギリス発祥のプロテスタントで、信仰の核心にあるのは、万人は霊的に平等であるという聖霊主義である。司祭を持たず、信者同士はフレンドと呼びあい、信者が主催する礼拝集会で静かに聖霊の到来を待つ。教区教会への「十分の一税」の支払い、脱帽・跪坐・低頭、武力の使用などを拒否した。17世紀後半に迫害を受け、信者集団の結束を固めるため、地域ごとに重層的な運営会議を構成し(月会、季会、婦人集会)、他地域のフレンド組織と活発に交流し、相互に支え合った。

非国教徒であるため、18世紀に差別や社会的疎外は続き、19世紀初頭でも公職への就任、公的な高等教育をうける機会は限定され、官僚、弁護士、医師への道は閉ざされていた。教区教会への「十分の一税」の支払いを拒否していたこともあって、クエーカーは都市部へ移動し、商工業に従事するようになった。とくに、ロンドン、ブリストル、イングランド北部の工業都市など、産業化が進む都市部に集中した。

クエーカーは、信仰を核に日常生活を律し、節約を旨とする禁欲的な集団で、18世紀には経済的成功を収める商業者が現われるようになった。そのような特性についてはウェーバーも注目し、プロテスタント的禁欲が顕著にみられる信者集団として、カルヴァン派とともにクエーカーをあげて

いる。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、「プロテスタント諸派のうちでもとくに<非現世的なこと>が富裕なこととともに諺のようになっている信団、わけてもクエーカーとメノナイトの場合に、宗教的な生活規制が事業精神の高度な発達と結合していることだ」と述べている²⁾。ウェーバーによれば、クエーカーは理性と良心に価値をおく教説をもっとも発達させた集団で、禁欲的特性は職業労働の内部へ浸透し、「正直は最良の商略」と言われるほど、内面的な達成と職業上の達成が同値のものとなっていた³⁾。

19世紀には企業経営者に成長するクエーカーが輩出した。綿工業（ブライト家、アシュワース家）、製鉄業（ダービー家）、銀行業（バークリー家、ガーニー家、ビーズ家）、ビスケット製造業（ハントリー家、パーマー家）、ココア・チョコレート製造業（ロウントリー家、キャドバリー家、フライ家）、化学工業（クロスフィールド家）、貿易業、ビール製造業、鉄道業などである⁴⁾。クエーカーは、公職から排除されていたため、実業で職業達成する以外に選択肢がなかったことも産業資本家としての成長を促した。

このように19世紀半ばにクエーカーの企業経営者は新興の産業ブルジョワジーとして頭角をあらわした。保守勢力である地主ジェントリ層に対抗し、自由貿易を推進する勢力の一翼を成した。19世紀前半に反穀物法運動を進めた指導者ジョン・ブライトもクエーカーで、クエーカーは自由党の支持勢力だった。

クエーカーにとって、家業のビジネスと社会改良に尽くすことは同等の価値をもつミッションだった。18～19世紀にクエーカーが関与した社会改良には、奴隷貿易廃止運動、成人学校運動、児童労働問題、精神医療施設改善、動物虐待問題などがある。B.S. ロウントリーの父ジョーゼフ・ロウントリーも熱心な自由党支持者で、社会的関心が高く、19世紀半ばには家業のかたわら、独自に統計資料を集めて、イギリスの貧困状況を推測した。クエーカーの集会で発表し、クエーカーの社会改良をリードした（図表2）。ニューイアーズウィックの建設は、このジョーゼフ・ロウントリーが

図表 2 ロウントリー: 家族史・社史・福祉・社会調査への取り組み

社史		家族史		福祉的活動	社会調査への取り組み
食品販売業	スカーバラ	家族経営的 自営	(クエーカー教徒)	クエーカー的 社会改良	
	ヨーク	家族経営的 自営	ジョーゼフ・ロウントリー I (生没年: 1801-1859)		
ココア 製造業+チョコ レート	I 期 1862 1896	家内工業的 生産	ジョーゼフ・ロウントリー II (生没年: 1836-1925)	企業内福祉の基 盤整備 1904年:3つの財 団を設立 ・The Village Trust ・The Charitable Trust ・The Social Service Trust	統計資料に基づく英 国の貧困状況調査
	II 期 1897 1918	資本主義的 生産 (基盤整備期)	↓		1901:第1次ヨーク貧 困調査 出版
	III 期 1919 1941	資本主義的 大量生産	B.シーボーム・ロウントリー (生没年: 1871-1954)		企業内福祉の再 編成

社長だった時期に始まったものである。

ロウントリー家はもともと英国北部の海岸保養地スカーバラ (Scarborough) で食品販売業を営む自営業主層だった。1822年に当主がヨーク (York) へ移動し、食品販売業を開業した。1862年、ヨークのクエーカー教徒テューク家からココア製造業を継承し、1897年に有限会社化した (Rowntree & Co. Ltd.)。有限会社になったときの経営者がジョーゼフ・ロウントリー (Joseph Rowntree II, 1836-1925) で、次男が B.S. ロウントリーである (長男は早逝)。B.S. ロウントリーは、1889年から自社で働き始め、

1897年労務担当取締役、1923～41年に社長の任にあった。

ロウンントリー社の経営は、B.S. ロウンントリーが社長の任にあった1941年まで3つに区分することができる。Ⅰ期は1862～1896年の家族的経営による家内工業的生産体制の時期（主力製品はココア）、Ⅱ期は1897～1918年の資本主義的生産体制の基盤整備期（主力製品はココアとチョコレート加工菓子）、Ⅲ期は1919～1941年の資本主義的大量生産の時期（主力製品はチョコ加工菓子へ移行）である。Ⅱ期にB.S. ロウンントリーが着手したのが、第1次ヨーク貧困調査である。

20世紀初頭、ロウンントリー社は3000人近くの従業員を抱える大企業になっていた。Ⅰ期とは異なって、Ⅱ期には大規模化した工場で働く自社従業員への福祉対策を組み直す必要に迫られ、企業内福祉の基盤が整備された。そのなかに労働者へ良好な住宅を供給することを目的にした田園ビレッジ建設があった。また、各種の企業内年金・給付制度が創設され、退職年金（1906年）遺族（寡婦）年金（1916年）、疾病給付（1920年）、失業給付（1921年）などが実現した。

1904年にロウンントリー社から独立した組織として、3つの財団が設立された（The Village Trust, The Charitable Trust, The Social Service Trust）。この中のThe Village Trustが「ニューイアーズウィック」田園ビレッジの建設・運営の主体になった。

3. ワーキング・クラスへの住宅供給モデル

ロウンントリーの「ニューイアーズウィック」建設は、キャドバリーの「ボンヴィル」をモデルにしたが、「ボンヴィル」の家賃が週当たりおおよそ8シリングになり、ワーキング・クラスには負担できないものになった先例をふまえ、慎重に建設計画が練られた。たとえば、B.S. ロウンントリーの第1次ヨーク貧困調査の知見によると、ワーキング・クラスはクラスA～Dの4段階に分類されているが、最貧困層のクラスAは週給18

シリング未満、クラス B は週給 18~20 シリング、クラス C は週給 21~30 シリング、クラス D は週給 30 シリング超である。余裕のあるクラス D でも、週 8 シリングの家賃は収入の 4 分の 1 を超え、ワーキング・クラスには実質的に負担できない金額であった。

ニューイアーズウィック建設では明確な目的が設定された。主たる目的は 2 つで、「ワーキング・クラスが現実に負担可能な住宅地を供給すること」と、「公的住宅供給を実現させるためのモデルを作る」ことである⁹⁾。イギリスで、地方行政による公的供給が本格化するのには 1920 年代である。図表 3 に示したように、ヨーク市では 1920 年代以降に公的供給が継続的に実施されるようになった。ニューイアーズウィックの建設は、実際に公的供給に先立つことになり、住宅供給のモデルを提示する役割を果たしたの

図表 3 ヨーク市における住宅建設戸数

年	民間供給	民間供給のうち、New Earswickでの建設戸数	民間供給	公的供給	合計
			政府補助金つき	政府補助金つき	
1900-04	1906	28			1906
1905-09	573	63			573
1910-14	398	123		30	428
1915-19	51	43			51
1920-29	284	(24年まで) 136	226	1549	2095
1930	89	不明	0	267	356
1931	82	不明	0	398	480
1932	195	不明	4	416	615
1933	267	不明		173	440
1934	560	不明		209	769
1935	616	不明		252	868
1936	488	不明		114	602
1937	465	不明		343	808
1938	561	不明		913	1474
1939	393	不明		156	549

出典：B.S.Rowtree, 1941, *Poverty and Progress*, Longmans, p.225に、武田修正加筆.

である。ワーキング・クラスに「現実に負担可能な住宅地」を供給するために立てられた具体的目標が、「低利」と「低家賃」だった。トラストが建設・運営の主体になり、住戸建設のため出資金を募集した。当時、住宅会社・住宅組合・住宅関係のトラストでは年5%の配当が一般的だったが、ニューイアーズウィックでは年3%を目標に設定した。これは出資者に対して、低利を要請するということになる。趣旨や活動の社会的意義を理解し、低利を受け入れてもらうことが必要だった。実直な経営姿勢を認めもらえるような努力が欠かせないものになった。

ワーキング・クラスでも負担可能な家賃に抑える一方で、3%の配当金を確保し、かつ住戸の建設を進め、良好な自然環境、社会環境（教育・文化・宗教的活動の基盤）を実現することが、ニューイアーズウィック運営の最優先課題になった。そのためには、すべてを理想的に実現するのは無理で、低利・低家賃維持のため「最低限必要なものは何か」を選択する必要に迫られた。トラストの運営会議録を見ると、B.S. ロウントリーもトラストの理事として、毎回この会議には出席し、トラスト運営委員たちと「本当に必要なものは何か」つまり、ベーシック・ヒューマン・ニーズを徹底的に議論し、緻密な計算を重ねている⁶⁾。

このようなベーシック・ヒューマン・ニーズを追求する姿勢は、B.S. ロウントリーによる2段階の貧困線を想起させる。第一次貧困線と第二次貧困線に分けて、貧困状況を把握し、最低限の生活保障とは何かを追求するアイデアと共通性がある。

ニューイアーズウィックの住戸建設は、1904～1923年の期間は図表4のように進捗した。第一次大戦中は建設数が減少し、戦後に増加した。1923年までのニューイアーズウィックの建設戸数の推移に基づく、第一次大戦中を境にして、二段階に分けることができる。トラストの運営会議録、保存資料等を見ると、主たる設計者として関わったのは、第一段階ではアンウィン、第二段階ではパーカーである⁷⁾。

この二段階は、イギリスの住宅問題をめぐる課題と対応している。第一

図表 4 ニューイアーズウィック 住宅戸数

年	戸数	
	新規完成戸数	合計戸数
1904まで		28
1905	13	41
1906	7	48
1907	14	62
1908	9	71
1909	20	91
1910	28	119
1911	24	143
1912	5	148
1913	24	172
1914	42	214
1915	31	245
1916	8	253
1917	0	253
1918	0	253
1919	4	257
1920	50	307
1921	32	339
1922	38	377
1923	16	393

出典: Joseph Rowntree Foundation:
NE21/1-2 summaries of New Earswick
Estate annual statistics, 1905-17, 1905-23.

段階（1904-15）の時期は、都市人口が増大し、ワーキング・クラスの住環境は劣悪で、公的住宅の供給の概念もなかった時期に相当する。都市の劣悪な住環境を改善する方法を具体的に示すことが必要とされていた。

第二段階（1920-22）の時期は、第一次大戦中の1918年に自由党の首相ロイド・ジョージが「英雄たち（帰還兵）にふさわしい家」の供給を公約したこともあって、政府は住宅の早期供給を実現する必要に迫られていた。公的機関が住宅供給に責任をもつ住宅・都市計画法（アディソン法）も制定された。しかし、第一次大戦後の住宅不足、失業問題は深刻で、住宅供給が緊急課題である上に、過剰な都市労働人口の解消、失業問題を解

決するため、政府は実行力を示す必要があった。労働者の権利要求の拡大に対応し、自由党の勢力を回復するためにも、住宅問題は重要な政治課題の1つだった。1920年代に、ニューイアーズウィックで試みられた短期工法に対して、首相のロイド・ジョージのレターが寄せられているが、このような緊張した政治状況が反映されたものであるといえよう。

4. 田園ビレッジの建設と推移

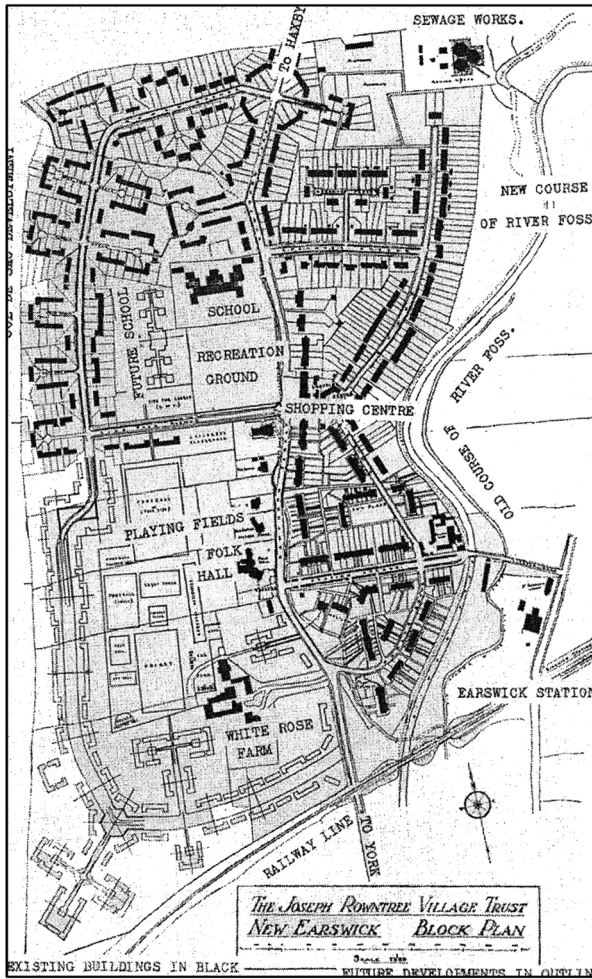
(1) 第一段階（1904～15年）：「経営」が成り立つ「設計プラン」の追求
低利・低家賃で経営を成り立たせるために、第一段階の時期にはどのような工夫が重ねられたのか、トラストの運営会議の記録から具体例を挙げてみよう。

トラストでは毎年新規の住戸を建設していた（図表5）。トラストの会計に占める住戸の建設費用の割合は大きく、経営を左右する。必要な設備は整える一方で、徹底したコスト削減の努力が必要とされた。議論が重ねられた課題の1つが「道路建設費用」だった。

イギリスではコミュニティの敷地内の道路整備は、各コミュニティの責任に任されている。設計者のアンウィンは、トラストの運営会議で道路建設・整備に最も費用がかかることを指摘し、道路コストの削減方法として「クル・ド・サック（cul-de-sac）」を提案している⁸⁾。「クル・ド・サック」は、道路の奥が通り抜けできないようになっている行き止まり道路のことで、行き止まりにサークル状のスペースが設けられ、その周囲に複数の住戸が配置される。車の通過がなく安全である上に、空間的に住戸がまとまった印象になる。クル・ド・サックを単位に住民は同一の空間を共有しているような感覚をもちやすく、コミュニティ・モラルの育成が期待できる。

トラストの運営会議でアンウィンは、道路費用の削減にクル・ド・サックが効果的である理由を次のような趣旨で述べている。クル・ド・サックのメリットは、道路空間の削減である。これは道路建設・舗装コストの節

図表 5 ニューイアーズウィックの住宅配置図



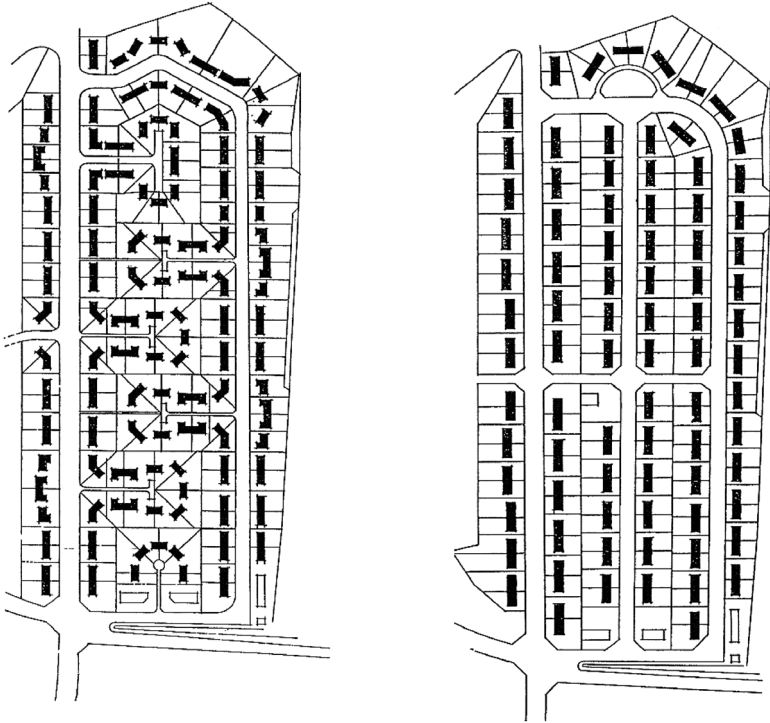
出典：Joseph Rowntree Foundation: NE21/1-2 summaries of New Earswick Estate annual statistics, 1905-17, 1905-23.

約につながる。道路空間を削減することによって、住宅用地が増え、住戸の配置など設計にも柔軟性が生まれる。これは、多様な住戸の建設を可能にする。ワーキング・クラスの収入や家族状況は多様であるため、高齢の

図表 6 クル・ド・サックによる道路建設コストの削減

◇道路空間を削減した設計プラン

◇公営賃貸住宅の敷地



夫婦世帯を想定して、小住宅を整備することが必要である。住宅用地に余裕があれば、ワーキング・クラスの実情に即した多様な設計が可能になる。また、道路面積は将来的に道路管理の維持にかかるランニング・コストに影響する。道路面積の縮小は、道路照明などコスト削減になり、トラストの経理面の負担を減らすことになる（図表 6）。

アンウィンのこのような提案に基づいて、委員会では道路建設費用を細かく試算している⁹⁾。一般的に、クル・ド・サックは田園都市に特徴的な設計デザインで、景観、交通、コミュニティ醸成などの面から意義があると理解されてきた。しかし、ニューイアーズウィックの経験は、クル・

ド・サックの異なるメリットを示している。ワーキング・クラスが居住可能な住宅地を実現させるため、道路コストの削減は重要な課題で、ニューイアーズウィックにおいてはそのための対策案が「クル・ド・サック」であった。

「クル・ド・サック」を導入することは、排水管の敷設方法にも影響を与え、住宅地としての基盤整備に関わる経費の削減につながった。従来は排水管の敷設は、住戸のバックヤード側を回す方法が一般的だったが、ニューイアーズウィックでは、住戸のフロント側に回し、排水管の集水のポイントを1カ所にまとめる設計デザインを取り入れた。クル・ド・サックの行き止まりスペースのサークルを取り囲むような敷設になる。住戸の配置、デザインも排水管の敷設が目立たないような工夫を取り入れた¹⁰⁾。

このようなクル・ド・サックや排水管の敷設経路にみられる工夫は、住区の基盤整備に関わる建設コストを抑えるために、設計デザインが重要であったことを示している。単なる田園的雰囲気を作り出すための設計ではなく、ワーキング・クラスが家賃を負担することが可能な住宅地を作り出すための設計デザインであった。

建設コストを抑えるため、建築資材の選択も重要な課題だった。運営会議では、レンガにかかる費用が高いことも議論の対象になった¹¹⁾。住戸の着工は継続的に進められる予定で、長期的展望に立って資材コストを削減することが検討された。ニューイアーズウィックでは鉄筋コンクリート建築の検討に着手し、自前のコンクリート工場を建てた¹²⁾。

このように第一段階の時期には、低利・低家賃で経営を成り立たせるために、多方面から建設コスト、ランニングコストの削減が検討され、それを可能にする設計デザインが検討された。田園の環境を表現する住区デザインとの調整が図られ、田園都市の理念を生かしたモデルを作り出す努力が重ねられた。

以上のような努力が成果を結び、ニューイアーズウィックでは1907年時点で、家賃は週当たり4~5シリングに抑えることができた¹³⁾。これはク

ラス C の労働者世帯では週給の $\frac{1}{6}$ ～ $\frac{1}{6}$ に当たる。ワーキング・クラスにも負担可能な住宅地が実現していった。

しかし、初期のトラストの運営では、社会的環境の整備費用を捻出することは難しかった。1907年にロウントリー家は、集会所（the Folk Hall）の建設費用を負担し、コミュニティ形成に必要な不可欠の施設ということで、トラストに寄付した¹⁴⁾。集会所の開所式ではジョーゼフ・ロウントリーは次のような内容のスピーチを行っている。

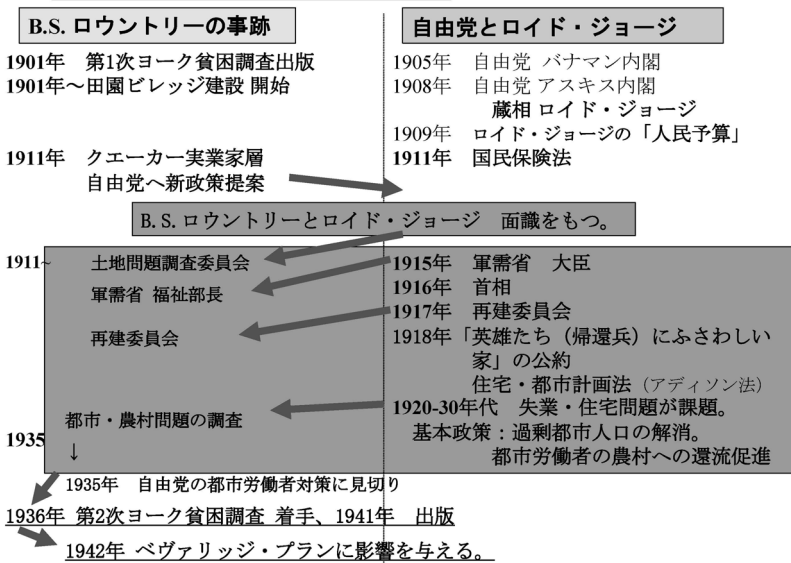
「ニューイアーズウィックの試みは、全国のソーシャル・ワーカーの多大な関心を集めています。この試みは、住宅問題に対して、何らかの対策を講じたいと思って始めたもので、経営的にうまくいくかどうかを示せる点に意義があります。3%の配当が可能ということを地方行政当局や建設会社に示すことができれば、同様の試みが増えるでしょう。3%が鍵なので、これを達成するためには、住宅建設に関して、財団に寄せられた多くの要請を断らねばなりません。Folk Hall はビレッジへの無料のギフトで、3%の配当金捻出の負担にはなりません。」

経営を成り立たせることに尽力する一方で、教育・文化・宗教的活動の基盤となる環境を整備することにロウントリー父子が深く関心を寄せていたことが表れている。ロウントリー父子は、長年にわたり、ヨークの成人学校運動に関わってきた。その経験が生かされて、ニューイアーズウィックでは学校教育面においても、整った教育施設が建設された。この時期、併行してロウントリー社の工場でも従業員対象の夜間成人学級が設置され、教育施設の整備が進められた。経営と環境整備（自然環境、社会環境）のバランスをとりながら、第一段階のニューイアーズウィックの建設は進められた。

（2）第二段階（1920～22年）：「短期工法」と「経営」の両立

B.S. ロウントリーは、貧困調査やニューイアーズウィックでの試みが、自由党のロイド・ジョージに認められるようになり、1910年代にロイド・

図表 7 B.S. ロウントリーとロイド・ジョージの親交



出典: 筆者作成

ジョージに要請されて、自由党や政府の要務を任された(図表7)。

自由党は1905年のキャンベル＝パナマン内閣以来、政権を握った。ロイド・ジョージは1908年に組閣された自由党アスキス内閣の蔵相を務め、1909年には「人民予算」を成立させ、1911年には国民保険法の施行を実現した。自由党が政権を掌握した状況を鑑み、1911年に自由党の支持勢力だったクエーカー実業家層は、政策提案をまとめ、自由党首脳部に提出した。このとき政策提案の中心になった実業家のなかにジョーゼフ・ロウントリーがいて、ロイド・ジョージとのネットワークが形成された。ロイド・ジョージのブレインとして見込まれたのが、B.S. ロウントリーで、第一次大戦中に政府の職に起用されるようになった。

ロイド・ジョージは、第一次大戦中の1915年には軍需省大臣、1916年には首相になった。1917年には戦後処理に対応するための再建委員会が政府内に組織された。B.S. ロウントリーは、ロイド・ジョージに要請され

て、1915～17年には軍需省の福祉部長、その後には再建委員を務めた。

ロイド・ジョージは第一次大戦中の1918年に、帰還兵を対象にした「英雄たち（帰還兵）にふさわしい家」の供給を公約した。また、1919年には住宅・都市計画法（アディソン法）を公布し、地方公共団体は管轄区域の住宅需要を調査し、適切な計画を作成することを義務づけた。このような社会的状況によって、第一次大戦後には住宅をすみやかに供給することが重要な政治課題になっていた。

この時期、ニューイアーズウィックでは、パーカーによって短期で住戸を完成させるスピード建設工法が試みられた。パーカーはこれを「フォード式」工法と称し、費用と時間の削減のため、ワーキング・クラス向け住宅として一般的だった2階建てテラスハウスではなく、「平屋」の建造を選択した。平屋であれば足場を組むコストや室内の階段にかかるコストを削減することができる。資材や人件費を節約し、工期も短縮できることが選択の理由だった。

工期の短縮と、建設コストの削減のため、敢えて温水設備を省いた住戸なども建造し、ワーキング・クラスの多様な状況に配慮できるようにした。つまり、ワーキング・クラスのニーズと経済力に対応して、多様な住戸タイプを用意することに留意したのである。

ニューイアーズウィックで試みられた短期工法に、首相のロイド・ジョージから下記のような賞賛のレターが寄せられた¹⁵⁾。

〈1919年12月11日付、ロイド・ジョージからB.S. ロウンツリー宛（要約）〉
「親愛なるロウンツリー、あなたがヨークで試みている短期住宅建設に大いに関心を持っています。12週間の工期を実現しようとしていること、他の工法と比較した結果、レンガを使ったほうがコストが抑えられると判断したことを知っています。それらが実現されれば、住宅不足解消に価値ある貢献をすることになるでしょう。あなたの試みに大いに関心を持っています。」

このような手紙をもらって、ニューイアーズウィックの建設スタッフは喜

び、首相官邸にちなんで自分たちのチームを「ダーウィング・ストリート (Downing Street)」と呼んだ。

さらに続けて、翌年6月に開催されたニューイアーズウィックの記念イベントに寄せてロイド・ジョージから次のようなレターが寄せられた¹⁶⁾。
〈1920年6月4日付、ロイド・ジョージからB.S. ロウントリー宛(要約)〉
「親愛なるロウントリー、ニューイアーズウィックの建築スタッフや、建築中の写真をありがとう。あなたが試みている短期工法に大変興味を持っています。建築に関わっている方々に、深刻な住宅不足に対処している努力を評価していることを伝えてください。コミュニティの現状を打開するには、適切な価格で手ごろな住宅を供給することにまざるものはないでしょう。あなたの試みはきわめて興味深いものです。」

このようにロイド・ジョージのレターには、ニューイアーズウィックの試みに非常に関心を持っている」ということが繰り返し書かれている。

このようなニューイアーズウィックの短期工法は、マスメディアを通して、次のように報道されている¹⁷⁾。

〈Yorkshire Herald : 1920年6月7日(要約)〉

「イングランドの多くの人々がニューイアーズウィックで試みられている短期工法に注目している。首相も関心を持ち、レターを寄せた。戦前にいくつかの田園ビレッジが建設されたが、現状の住宅不足解消に対しても、モデルを示すことができるかどうか、どの程度のコストで住宅を建設できるのか、国内の難問題に対処できるのかどうか人々は注視している。

ニューイアーズウィックで試行された短期工法が第一次大戦後の社会的要請に応えるものであったことがわかる。

6. むすび

ニューイアーズウィックの事例を通して、明らかになったことの一つは、20世紀前半を通じて、増大するワーキング・クラス人口を対象にした

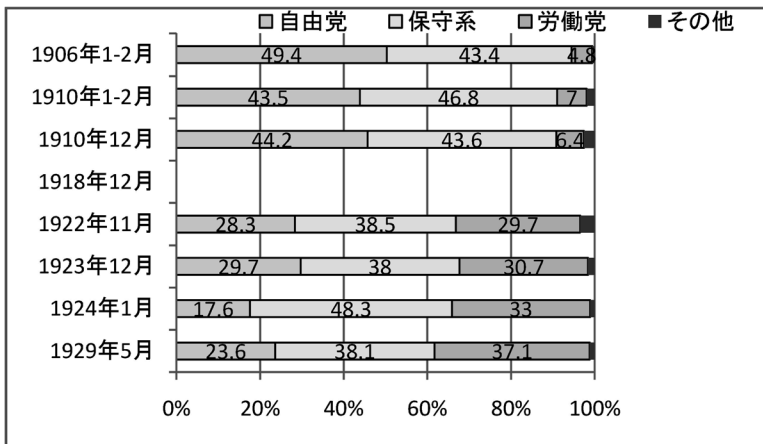
住宅供給の「モデル」が求められ続けられたということである。

1904～20年代前半までのニューイアーズウィック建設の推移や社会から寄せられた反応をみると、ニューイアーズウィックには常に公的住宅供給に先立つ「モデル」としての意義があった。第一段階（1904～15年）では、低利・低家賃の「経営」と「良好な環境」を両立させ、ワーキング・クラスが負担することが可能な良質の住宅をどのように作り上げていけばよいかという実例を示した。

第二段階（1920年代）では、能率的な工法を開発した。ワーキング・ク

図表 8 1890-1929年の各党の票率

総選挙日	得票率 (%)			
	自由党	保守系	労働党	その他
1890年9-10月	45.0	50.3	1.3	2.6
1906年1-2月	49.4	43.4	4.8	0.6
1910年1-2月	43.5	46.8	7	1.9
1910年12月	44.2	43.6	6.4	2.5
1918年12月	連立内閣			
1922年11月	28.3	38.5	29.7	3.5
1923年12月	29.7	38	30.7	1.6
1924年1月	17.6	48.3	33	1.1
1929年5月	23.6	38.1	37.1	1.2



ラスの需要に速やかに応える住宅供給モデルを提示し、地方行政による公営住宅供給が本格化するための実例を提供した。

このような試みは政府首脳に関心を引いたが、これは第一次大戦後の自由党の勢力の趨勢と関連している。19世紀末から20世紀前半にかけて、自由党勢力の伸張・衰退は図表8のように推移した。1920年代には労働党の勢力が伸長し、自由党の勢力は衰退傾向にあった。党勢を回復させるため、自由党は住宅問題と失業問題を解決する実行力があることを示す必要があった。ニューイアーズウィックの試みは、自由党の焦眉の課題解決に益するものだった。貧困研究によってワーキング・クラスの状態に熟知し、かつ自由党支持者であり、ロイド・ジョージと近い関係にあったB. S. ロウントリーにとっても現実的な課題解決の糸口を見つけることは、貧困研究に続けて社会改良・福祉の案を練る上でも取り組まねばならない問題だったといえよう。

従来の先行研究では、田園都市運動が結果的にミドル・クラス対象の住宅供給モデルとして有益だった側面が明らかにされてきた。しかし、ニューイアーズウィックの事例は、当時の社会状況を鑑みると、ワーキング・クラス対象のモデルを提示することへの社会的要請は大きく、ニューイアーズウィックのように、田園都市運動の流れをくんだ建設事例に、その要請に応えるものがあったことを示している。20世紀のイギリスにおいては、労働者に対する「生活保障」「福祉」の一政策として、住宅政策が位置づけられいく。ニューイアーズウィックの事例に、福祉国家形成の基礎が形成されていくプロセスを読み取ることができる。

註

- ※ [R〇/〇/〇] [C. W. M. 〇〇] の表記は Borthwick Institute of Historical Research, University of York, Rowntree and Co. Collections に所蔵されている資料の番号。

- 1) [Ashworth 1954] [東 1991] [増田 1993] [西山八重子 2002] [西山康雄 1992]
[山本 2007]
- 2) [Weber 1920=ウェーバー 1989 : 32]
- 3) [Weber 1920=ウェーバー 1989 : 263, 267, 279, 281]
- 4) [山本 1994 : 150-200]
- 5) [JRVT/MT93/1/1, 1904], [JRVT/MT93/1/2], [JRVT/MT93/1/2b, 1921]
- 6) [NE 21/3a] Village Conference, 16th, Nov. 1906, [NE 21/3c] Village Conference, 15th, Jan. 1907
- 7) [NE 21/3c] Village Conference, 27th, Feb. 1907, [NE 21/17a] Barry Parker, *The Joseph Rowntree Village Trust, Housing*, 29/March/ 1920, [NE 21/17d] Barry Parker, 'The Joseph Rowntree Village Trust Earswick', *Housing* : 1921 March. 248-249
- 8) [NE 21/3c] Village Conference, 27th, Feb.1907
- 9) [NE 21/3d] Village Conference, 4th, Mar. 1907
- 10) [NE 21/3d] Village Conference, 27th, Sep. 1907
- 11) [NE 21/3c] Village Conference, 27th, Feb. 1907
- 12) [*The C.W.M.* No. 115.1911, Sep.], [*The C.W.M.* No. 136.1913, June], [NE 4/1a] The Brickyard and Tile Yard close down
- 13) [NE 21/3c] Village Conference, 27th, Feb. 1907
- 14) [NE 3/2a] New Earswick Social Club, 1907, [NE 21/2b] Joseph Rowntree's address at opening at Folk Hall, 5, oct 1907, [*The C.W.M.* No. 69.1907, Nov.],
- 15) [Rowntree Papers [Box3, Fiche43, Lloyd George letters] Letter from DLG to BSR, 11/Dec./1919,
- 16) [Rowntree Papers : Box3, Fiche43, Lloyd George letters : Letter from BSR to FES, 28/May/1920], [Rowntree Papers : Box3, Fiche43, Lloyd George letters] Letter from DLG to BSR, 4/June/ 1920].
- 17) [NE 21/17a] *Yorkshire Herald*, 7th/June/1920

参考文献

- Ashworth, W., 1954, *The Genesis of Modern British Townplanning : A Study in Economic and Social History of Nineteenth and Twentieth Centuries*, Routledge and Kegan Paul. [アシュワース（下総薫監訳）『イギリス田園都市の社会史』御茶の水書房, 1987年]
- 東 秀紀, 1991, 『漱石の倫敦, ハワードのロンドン—田園都市への誘い』中央公論社.

- 東 秀紀・他, 2001, 『明日の田園都市への誘い—ハワードの構想に発したその歴史と未来』 彰国社.
- Bradley, John, 2008, *Cadbury's Purple Reign*, John Wiley & Sons.
- Briggs, A., 1961, *A Study of the Work of Seebohm Rowntree*, Longmans.
- Chinn, Carl, 1998, *The Cadbury Story*, Brewin Books.
- Clarke, Peter, 1996, *Hope and Glory : Britain 1900-1990*, London : Penguin Books.
- Hampson, Martin, 2001, *Bournville and Weoley Castle*, Tempus Publishing Limited.
- Hardy, D., 1990, "The Garden City Tradition Re-examined, Report of the Fourth International Planning History Conference, Bournville, the UK", *Area*, 22 (1).
- , 1991, *From Garden Cities to New Towns : Campaigning for Town and Country Planning*, 1899-1946, E. & F.N. Spon.
- Hare, William Loftus, 1935, New Earswick : The work of the Joseph Rowntree Village Trust, *Town & Country Planning*, vol. 3, No. 10 : 46-55.
- Howard, Ebenezer, 1898, *To-morrow : A peaceful path to Real Reform*, London : Swann Sonnenschein & Co. Ltd.
- , 1902, *Garden Cities of To-morrow*, London : Swann Sonnenschein & Co. Ltd.
[エベネザー・ハワード (長素 連訳) 『明日の田園都市』 鹿島出版会, 1968年]
- 片木 篤, 1987, 『イギリスの郊外住宅 : 中流階級のユートピア』 住まいの図書館出版局.
- 増田 聡, 1993, 「エベネザー・ハワードの田園都市論」, 吉原直樹編『都市の思想』 青木書店 : 136-157.
- Murphy, Joe, 1987, *New Earswick*, York : Sessions Book Trust,
- 中島明子, 2003, 『イギリスにおける住居管理』 東信堂.
- 中島直子, 2005, 『オクタヴィア・ヒルのオープン・スペース運動—その思想と活動』 古今書院.
- 西山八重子, 2002, 『イギリス田園都市の社会学』 ミネルヴァ書房.
- 西山康雄, 1992, 『アンウィンの住宅計画を読む』 彰国社.
- Parker, Barry, 1920, The Joseph Rowntree Village Trust, *Housing*, March/ 1920.
- , 1921, 'The Joseph Rowntree Village Trust Earswick', *Housing* : 1921 March. 248-249
- , 1937, Site Planning, As Exemplified at New Earswick, *The Town Planning Review*, vol.XVII, 1937 : 79-102.
- Rowntree, B.S., 1901, *Poverty : A Study of Town Life*, Macmillan.
- , 1921, *The Human Factor in Business*, Longmans.
- , 1941, *Poverty and Progress : A Second Social Survey of York*, Longmans.
- , 1951. *Poverty and the Welfare State : A third Social Survey of York dealing*

only with economic questions, Longmans.

- Swain, W.J., 1911, *Ferro-Concrete Buildings*, *The C.W.M.* No. 115.
- , 1913, *Ferro-Concrete Buildings*, *The C.W.M.* No. 136.
- 武田尚子, 2010, 「戦間期イギリスにおける「科学的管理」の導入—ロウンツリー社における産業心理学の導入と労働インセンティブ—」『年報 科学・技術・社会』第19巻: 53-78.
- , 2010, 「イギリス近代都市史: ヨークのスイーツ産業—B.S. ロウンツリーの社会調査と社会実践」『都市における中間層の変容過程と社会調査: 格差社会分析の国際比較のための実証研究』2009年度中間報告書, 平成21~24年度科学研究費補助金研究成果報告書I (研究代表者: 武田尚子)
- 山本 通, 1992, 「20世紀初頭英国クエイカー派の経済・経営思想についての二つの資料」『経済貿易研究』18, 神奈川大学経済貿易研究所: 141-160.
- , 1994, 『近代英国実業家たちの世界—資本主義とクエイカー派』同文館.
- , 2006, 「B. シーボーム・ロウンツリーの日本滞在記(1924年)」『商経論叢』41(3, 4) 神奈川大学経済学会: 51-66.
- , 2007, 「B. シーボーム・ロウンツリーと住宅問題」『商経論叢』43(2) 神奈川大学経済学会: 1-55.
- Vaughan, A., & Jordan, P., 2004, *George Cadbury and Bournville*. The Friends of Bournville Carillon.
- Vernon, Anne, 1958, *A Quaker Business Man, The Life of Joseph Rowntree 1836-1925*, *George Allen & Unwin Ltd.* [ヴァーノン(佐伯岩夫, 岡村東洋光 訳)『ジョーゼフ・ロウンツリーの生涯』創元社, 2006年]
- Weber, 1920, *Die Protestantische Ethik und Der Geist Des Kapitalismus*, [ウェーバー(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店, 1989年]

資料

Borthwick Institute of Historical Research, University of York, Rowntree & Co. Collections に所蔵されている資料については、資料番号を [R〇/〇/〇] [C.W.M,〇〇] のように記す。

- [NE 3/2a] New Earswick Social Club, 1907.
- [NE 4/1a] The Brickyard and Tile Yard close down
- [NE 21/2b] Joseph Rowntree's address at opening at Folk Hall, 5, oct 1907
- [NE 21/3a] Village Conference, 16th, Nov. 1906
- [NE 21/3c] Village Conference, 15th, Jan. 1907

- [NE 21/3c] Village Conference, 27th, Feb. 1907
- [NE 21/3d] Village Conference, 4th, Mar. 1907
- [NE 21/3d] Village Conference, 27th, Sep. 1907
- [NE 21/13b] History of 'The Village of New Earswick' by Rended Ridges.
- [NE 21/16] When New Villages Were New, *Rural View Point*, No. 38, Aug./1990.
- [NE 21/17a] *Yorkshire Herald*, 7th/ June/1920
- [NE 21/17a] Barry Parker, *The Joseph Rowntree Village Trust, Housing*, 29/ March/ 1920
- [NE 21/17d] Barry Parker, 'The Joseph Rowntree Village Trust Earswick', *Housing* : 1921 March.248-249
- [NE 21/17e] The Story of New Earswick, *The Magazine of Today*, 1930
- [NE 21/18] *Yorkshire Evening Press*, 10th/July/1979
- JRVT/MT93/1/1, 1904
- JRVT/MT93/1/2
- JRVT/MT93/1/2b, 1921
- [Rowntree Papers [Box3, Fiche43, Lloyd George letters] Letter from DLG to BSR, 11/Dec./1919,
- [Rowntree Papers [Box3, Fiche43, Lloyd George letters] Letter from BSR to FES, 28/May/1920.
- [Rowntree Papers [Box3, Fiche43, Lloyd George letters] Letter from DLG to BSR, 4/June/ 920.
- The C.W.M.* No. 43.1905, Sep.
- The C.W.M.* No. 69.1907, Nov.,
- The C.W.M.* No.. 1908, Feb
- The C.W.M.* No. 115.1911, Sep.
- The C.W.M.* No. 136.1913, June
- The C.W.M.* No. 96.1910, Feb